

水洗便器初の国産

第6部 陶磁器を世界へ〈8〉

時流の先へ

中部財界ものがたり

日本ではめったにない水洗トイレが、どこへ行っても当たり前のように備わっていた。一九〇三(明治三十六)年、陶磁器研究のため英国やドイツなど欧州各地を訪れた大倉和親は、用を済ますとすぐに水で洗い流せる快適な水洗便器に心を奪われる。「いずれ衛生陶器の時代が来る。今から国産化を急がねばならない」。翌年に日本陶器の社長となる和親は確信した。

欧州視察の際、案内をしてくれた英国人実業家がベルトコンペヤー式に次々に陶器を焼けるトンネル窯を紹介した。「これを衛生陶器づくりに生かすべきだ」と勧められ、和親はさらに意欲を燃やす。

和親の孫で東京に住む渡辺弘雄(七)は「戦後いち早く



製陶研究所で衛生陶器の国産化に向けて試作する作業員＝1912年、名古屋市の日本陶器で(TOTO提供)

く家にテレビを買うなど、祖父は新しいものが好きだと語る。

「当時の日本に下水道はなく、水洗便器はごく一部の上流家庭が輸入品を使っていた時代。水洗便器をつくるという和親の夢は、すぐにはかなわない。和親と父孫兵衛の親子は、電力用がいしの国産化を親会社(森村組(現森村商事))に認めさせたが、衛生陶器事業に對しては「需要が見込めない。無謀だ」と猛反対に遭った。

それでも和親らはひるまなかった。「国のため、新分野開拓のため、一日も早く研究を始めなければ」。そう思い、一二年初めに親子で計二十万円(今の二億円程度)もの私財を投じて、名古屋の日本陶器本社

内に衛生陶器の研究所をつくる。大型の衛生陶器は焼く時に変形しやすく、試作は難航する。社史などによると、主任技師の西山貞(故人)は「海のものとも山のものとも分からぬ」と嘆き、ノートには「一万七千二百八十種の調査と焼成を重ねた」と書き残した。

苦心の末、一四年に完成した国産第一号の水洗便器は、後に日本で長く標準型となる和式ではなく、腰掛けるタイプの洋式だった。「海外製と肩を並べるには洋式しかない」という思いからだ。これをそのまま市販し、後にTOTOの代名

「東洋陶器」 1917(大正6)年、今の北九州市小倉北区に設立され、国内で初めて衛生陶器の生産を始める。日本ガイシの分社化より2年早く、森村グループの分社化第1号。社名の「東洋」には、アジア市場開拓の意志を込めた。70年に社名を東陶機器に変え、2007年にTOTOとなる。現在、トイレや洗面器など衛生陶器の国内シェア6割を占める。中国やアジア・オセアニア向けの水洗便器、浴槽などが売上高の15%程度を占める。一方、1924年には大倉和親の支援を受けてタイル製造の伊奈製陶が愛知県常滑市に設立され、森村グループに加わった。85年にINAXと社名変更し、TOTOに次ぐ国内第2位の衛生陶器メーカーとなる。2001年に住宅建材大手のシステムと経営統合した際に森村グループを離脱した。

「TOTO」北九州で産声

詞となる温水洗浄便座「ウォシュレット」の誕生につながる。

TOTO歴史資料館長の山谷幹夫(六三)は「洋式にはさまざまな機能をつけることができる。和風のしゃがむタイプから洋風の腰掛け式へと日本人の習慣までも変えようとしていたのではないか」と語る。

新天地選びでも和親の先見の明が生きる。北九州・小倉は、原料の朝鮮力オリンや天草陶石、燃料となる筑豊の石炭が手に入りやすく、アジアへの輸出に適した門司港が近く三拍子そろった場所。工場用地は一三年、別の仕事で偶然訪れた農地に一目ぼれし、これも私財をはたいて早々と手に入れていた。

「欧州の製品を凌駕し、世界の需要にこたえて、まず貿易を盛んにする」。一七年一月、和親が建設中の小倉工場の壁に刻んだ決意は、貿易で国を豊かにすることを望んだ森村組の信念と重なる。四力月後、工場は東洋陶器として独り立ちし、和親が初代社長に就く。(文中敬称略)